福岡観世会定期能

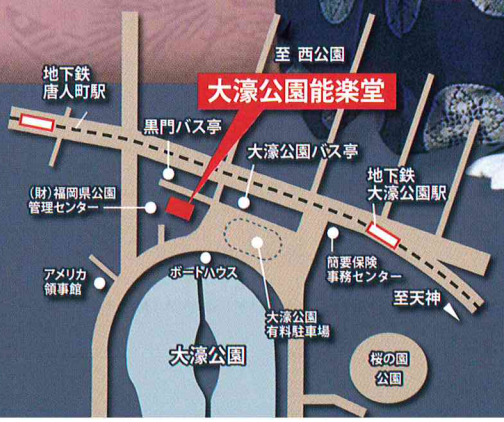
平成二十七年（第二回）

能　葛（かづら）　観世　清和

大和舞　城（き）

狂言　佐渡狐（さどぎつね）　野村　万禄

能　玄象（げんじょう）　森本　哲郎



とき　12月5日(土) 午後1時始

ところ　大濠公園能楽堂

入場券　自由席 7,000円

発売所　大濠公園能楽堂事務所

092-715-2155

葛城

観世清和

大和舞

能

仕舞

敦盛（キリ）　木月晶子
三輪　菊本澄代
野宮　谷村育子
邯鄲（舞アト）　長宗敦子

地謡

松田美栄子
菊本美貴
今村宮子
多久島法子

間

江崎正左衛門

白坂信行
飯田清一
田中達
森田徳和

野村万禄

後見

坂口貴信
木月孚行

地謡

今村嘉太郎
山口剛一郎
久保誠一郎
今村一夫
鷹尾維教
坂口信男
角寛次朗
今村嘉伸

＜休憩十分＞

佐渡狐

狂言

野村万禄

吉住講
吉良博靖

仕舞

兼平道明寺　今村一夫
遊行柳（クセ）　木月孚行
松虫（キリ）　角寛次朗
船橋　山本章弘
山口剛一郎

地謡

井内政徳
多久島利之
坂口信男
久保誠一郎

＜休憩十五分＞

玄象

師長　鷹尾維教
姥　今村嘉太郎
龍神　井内政徳
森本哲郎

能

江崎正左衛門

白坂保行
幸正佳
吉谷潔
相原一彦

間

吉住講

後見

今村一夫
山本章弘

地謡

小倉康太郎
山口敏弘
武富昭
山口剛一郎
久保誠一郎
今村嘉伸
多久島利之
坂口貴信

附祝言

◆葛城（かづらき）・大和舞（やまとまい）

作り物の山を覆う純白の雪が、お客様を一面の銀世界へと誘います。

出羽の羽黒山で修業を終えた山伏が大和の葛城山へやって参ります。雪に困っていると、里女が声をかけ、庵に案内してくれました。焚火をしながら、女は、雪の中集めた枝を楚樹（しもと）と呼ぶのだと言い、ゆかりの古歌など口ずさみながら、もてなすのでした。その親切に感謝し、夜の勤行を始めようとする山伏に、里女は自らの苦しみを助けてくださいと祈祷を頼みます。昔、役行者が岩橋を架けよと下した命に背いたため、不動明王の索により、蔦蔓に縛られて苦しみ続けている自身の身の上を語り、女は消え去ります。

麓から上がってきた男にいろいろ尋ねている内に、先程の里女が葛城明神の化身であったと知った山伏は、大変有難く思い、夜もすがら祈祷をしていると、葛城明神が姿を現します。祈祷を喜び、三熱の苦しみを免れた喜びを伝え、大和舞を舞います。月と雪に照らされた静かな時間が過ぎていき、やがて暁近く、醜い顔かたちが露わになる夜明け前にと言って、女神は岩戸の内へ姿を隠したのでした。

小書の「大和舞」が付きますと、序之舞が神楽に変わります。他に、イロエや短い特殊な序之舞になったりという演出もございます。しんしんと雪降り積もる夜の静寂と女神の情趣が印象深い能でございます。

◆佐渡狐（さどぎつね）

都へ年貢を納めに出た佐渡の百姓と越後の百姓が道連れになります。

佐渡に狐がいるかいないかで言い争いとなり、二人はそれぞれが持つ一腰（刀）を賭け、奏者（取次役人）に判定してもらうことにします。佐渡の百姓は、奏者に賄賂を贈り、狐の姿形を変えてもらいますが・・・。

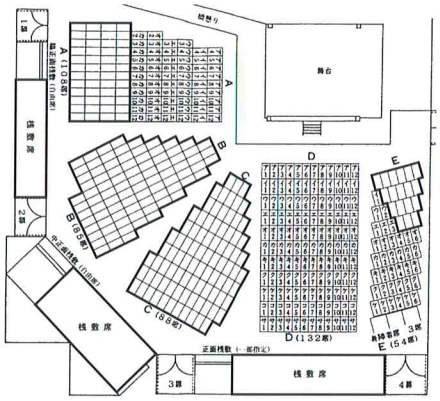
◆玄象（げんじょう）

琵琶の名手として天下に知られた藤原師長は、更に学び磨くため、唐へ行きたいと思っていました。その望みを果たすため、都を出て、須磨まで来た時に、潮汲みの老人夫婦と出会い、その家に泊まることとなります。夫婦に所望された師長が琵琶を弾き始めると、ちょうど雨が降ってきます。すると尉は、琵琶は黄渉調、雨は盤渉調であるから、琵琶の音をよく聞くために、苦を屋根に置き、調子を整えるという事を致しました。驚く師長一行を前に、尉は得も言われぬ琵琶の演奏を披露し、実は夫婦は、村上天皇と梨壺の女御の霊で、師長の入唐を止めるために現れたのだと明かします。

やがて村上天皇が、あでやかで高貴な姿にて登場し、海中に沈んだとされる琵琶の名器獅子丸を、龍神に命じて持ってこさせ、師長に与えます。師長は琵琶を弾じ、村上天皇は舞を舞われ、須磨の浦を背景に美しい光景が繰り広げられます。渡唐をとどまり、都へ帰る師長の後ろ姿も満足げです。

初同（最初の地謡）には、『融』を思い起こさせる詞章や、『松風』の行平の和歌も出て参ります。また、尉が琵琶を弾く場面「梅が枝にこそ・・・」の部分は越天楽『梅が枝』の唱歌を謡に盛り込んだものです。場面転換の鮮やかなだけでなく、奥行きの深い能でございます。

〔記・菊本澄代〕



※番号が書かれていない席は自由席です
※桟敷席は自由席です

主催／福岡観世会